

## 射しこむ光を仰いで

主任司祭 吉池 好高

あらたまの年のはじめの あげぼのに 光あれとの みことば響く

クリスマスの喜びのうちに、教会は新年を迎えます。世界の歴史の節目、そして、私たちの人生の節目を記し付ける、年の暮れと新たな年の初めを貫いて、射しこむ光のあることを私たちは知ったのです。クリスマスの夜、私たちの世界にお生まれになった神の子は、この世界の再創造のために、創造主である神のもとからこの世界に来てくださったのです。「光あれ」という創造のみことばを、私たちの世界に回復するために、私たちの世界にお生まれになったのです。

クリスマスの夜、羊飼いたちの野に輝き出た光、そして、年を越して祝う御公現の祝日に、東方の博士たちを導いた星の光は、私たちの上にも輝いています。

暗い夜道を彷徨い続けることを強いられる、この時代の人々の中であって、私たちは、この世界の上に輝く光を仰ぎ見なければなりません。

「あなたがたは世の光である。」これが、私たちに与えられた使命です。けれども、私たちもこの時代を歩む一員として、私たち自身の光に不安を感じています。私たちの光は年々その輝きを増すどころか、辛うじて自分の足もとを照らすのに精一杯の状態です。過ぎ行く年にも、私たちは幾度となく、その光が消えそうになる不安を経験しました。

それでも、年ごとに、新たな心で新年を祝うのは、この時代を生き抜くためです。そのために、私たちは新たな年に希望を託します。けれども、それだけでは、私たちは再び幻滅を経験することでしょう。新たな年はそれを迎えるだけでは、希望をもたらしてはくれません。そのためにも、私たちは射しこむ光を必要としているのです。